

## 研究論文

在宅療養を継続している夫婦のみの高齢者世帯における  
要介護者の思いFocus on mindset of frail elderly in elderly couples  
who are continuing home Care

永井 桜子 (Sakurako Nagai)\*

高橋 利枝 (Rie Takahashi)\*\*

平野 よしみ (Yoshimi Hirano)\*\*\*

岡村 知佳 (Chika Okamura)\*\*\*\*

竹崎 久美子 (Kumiko Takezaki)\*\*\*\*\*

## 要 約

本研究は在宅療養を継続できている夫婦のみ高齢者世帯に焦点を当て、要介護者の介護者に対する主観的な思いがどのように在宅療養継続に影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とした、質的帰納的研究である。4名の対象者に2回ずつインタビューを実施した結果、要介護者側の思いの因子には、介護者・要介護者それぞれが相手に対して思いやりを抱く『相互ケア』として、『感謝の気持ちがある』『一緒に生活していきたい』『配偶者への気遣い』『頑張っている』の4因子が、また具体的な介護に関連した行為である『協働したケア』の因子には、『頑張っている』『我慢している』の2因子が抽出された。これらの因子は長年の夫婦関係を基盤とした双方を思いやる『相互ケア』があると、要介護高齢者の行為は『協働したケア』になり得るが、互いの『相互ケア』が薄れると、要介護高齢者の努力は『協働しようとする行為』に留まり、『協働したケア』に至らないことが明らかとなった。

キーワード：要介護高齢者、思い、高齢者夫婦のみ世帯、介護継続

## I. は じ め に

わが国の65歳以上人口が総人口に占める割合は、2004年には19.5%、2050年には35.7%に達すると推計されており、人口の急激な高齢化に伴う要介護高齢者の増加が予測される。65歳以上の高齢者で介護認定を受けているのは2003年で370.4万人である。また、「夫婦のみ世帯」や「単独世帯」の増加がみられ、2003年では高齢者の「夫婦のみ世帯」が28.1%と最も高い割合を占めている現状である<sup>1)</sup>。更に平成13年度の国民生活基礎調査では、要介護者を介護する高齢者夫婦世帯は18.3%であったが、平成16年度の調査では19.5%と増加しており<sup>1)</sup>、高齢者が高齢者を介護する老々介護が課題となっている<sup>2)</sup>。

高齢者の在宅介護に関する文献を見ると、

介護者に焦点を当てて研究されている文献が多く、その中では介護者の介護継続意思が介護継続に強く影響していることが述べられていた。一般に介護は、介護者あつての要介護者であると考えられている。しかし、我々は特に両者の関係性が近いと考えられる老々介護においては介護を継続していくために、要介護者の介護に対する肯定的受けとめも在宅療養を主体的に継続させていく上で重要となると考えた。

そこで今回我々は、在宅療養を継続することができている夫婦のみ高齢者世帯に焦点を当て、介護を受けることに対する要介護者側の主観的な思いを知り、それらがどのように介護継続に影響を及ぼしているのかを明らかにしたいと考えた。

\*高知県南国市立奈路小学校

\*\*高知赤十字病院

\*\*\*九州大学病院

\*\*\*\*北里大学病院

\*\*\*\*\*高知女子大学

## Ⅱ. 文 献 検 討

### 1. 文献検討

我々は、在宅療養の継続に影響を及ぼす要因を探るために、「高齢者」「配偶者」「介護」などをキーワードに文献を検討した。その中でも夫婦のみの高齢者世帯を対象とした文献は19件であり、それらより特徴的な要因を抽出した。夫婦のみの高齢者世帯が在宅療養を継続していく上で特徴的であったのは【相互作用】であり、その中には『相互ケア』『協働したケア』が挙げられた。

文献を検討していく中で、大塚<sup>3)</sup>は『協働したケア』を相互作用しながら夫婦一緒に取り組むこと、『相互ケア』を互いに思いやり、いたわりあい、感謝し合うことと述べていた。本研究で我々は『協働したケア』を相手のために行っている具体的な介護行為を2人で協力し合って実施すること、『相互ケア』を、介護者・要介護者それぞれが相手に対して思いやりを抱き、それを自覚し、相手に何らかの形で向けることと捉えた。

【相互作用】について大塚<sup>3)</sup>は「相互ケアは、介護活動のように目に見えなくて自覚されにくい、自覚されると相手の心に喜びを与えて互いに喜びを感じあえるもので、介護活動は十分でなくても、協働したケアの中にある何気ない心遣いなどの相互ケアがあれば、高齢者夫婦は互いに満足できる」と述べ、「協働したケアは、相互作用しながら夫婦一緒に取り組む中で、互いに思いやり、いたわりあい、感謝し合う相互ケアを出現させていると考える」とも述べている。したがって、大塚<sup>3)</sup>は『協働したケア』を行うなかで、相手への思いやりなどの『相互ケア』が生じてくると述べている。しかし、我々は高齢者夫婦には長年培ってきた関係性により『相互ケア』の基盤が存在すると考えた。このことにより、介護を行っていく中で、『相互ケア』が『協働したケア』に繋がり、夫婦のみの高齢者世帯でも在宅療養が継続出来ているのではないかと考えた。

また、夫婦のみの高齢者世帯に焦点を当てて研究されていた19件の文献を検討した結果、

要介護者の介護者に対する思いは明らかとなったが、それらの思いは要介護者自身が述べたデータから明らかにされたものではなく、全て介護者が代弁した思いであった。このことから、要介護者自身が述べている介護者に対する思いは、今回の文献検討では見出すことが出来なかった。

### 2. 研究目的及び研究意義

本研究においては、在宅療養を継続することが出来ている夫婦のみの高齢者世帯に焦点を当て、要介護者の介護者に対する主観的な思いを聞き、それらがどのように在宅療養の継続に影響を及ぼしているのかを明らかにすることを目的とした。

本研究を通して、【相互作用】を要介護者側からも明らかにすることで、高齢者夫婦を介護者・要介護者として捉えるだけでなく、両者を夫婦として捉え、夫婦の【相互作用】に合わせた看護を提供することにつながるのではないかと考える。

## Ⅲ. 研 究 方 法

### 1. 対象者の選定

対象者は以下の要件を満たす人とした。

- ・ A県内に居住している要介護者で、デイサービス、デイケアを利用しており、要介護度2～3に該当する人。
- ・ 両者65歳以上の夫婦のみ世帯で、在宅療養を2年以上継続している人。
- ・ うつ病、失語症、認知症等、コミュニケーションや認知機能に障害のない人。
- ・ 30分～1時間の面接に耐えることの出来る人。

3施設に協力を依頼し、対象者の要件を満たし、研究協力への同意が得られた方を紹介して頂いた。その後、対象者に文書と口頭で研究の趣旨、方法などを説明した上で面接を依頼し、男性3名、女性1名の4名から同意と協力が得られた。

### 2. データ収集

研究デザイン：質的帰納的研究

データ収集期間：2006年8月7日～9月15日

データ収集方法：本研究は、対象者1名につき研究者2名で半構成的インタビューを行った。また、1回目の面接の後、得られたデータを振り返り、再度対象者に確認したい内容を検討し、更に対象者への理解を深めることを目的として2回目のインタビューを実施した。インタビュー内容は、対象者の理解を得て録音し、同時にメモを取りながら記録した。面接は30分から1時間程度行い、同席した他の1名は対象者の言動を注意するとともに質問内容に抜かりがないように配慮した。

### 3. 倫理的配慮

研究への協力を依頼するにあたって、研究への協力は自由意志であり、面接途中でも参加を中止する事が可能であることや、話したくない内容は話さなくても良いこと、面接で得られたデータは研究目的以外では使用しないことを保障した。また、データ化する際には個人が特定されないように記録し、得られたデータは鍵付きの場所で保管し外部に漏れることがないように配慮した。

尚、実施にあたっては高知女子大学看護研

究倫理審査委員会の承認を得た。

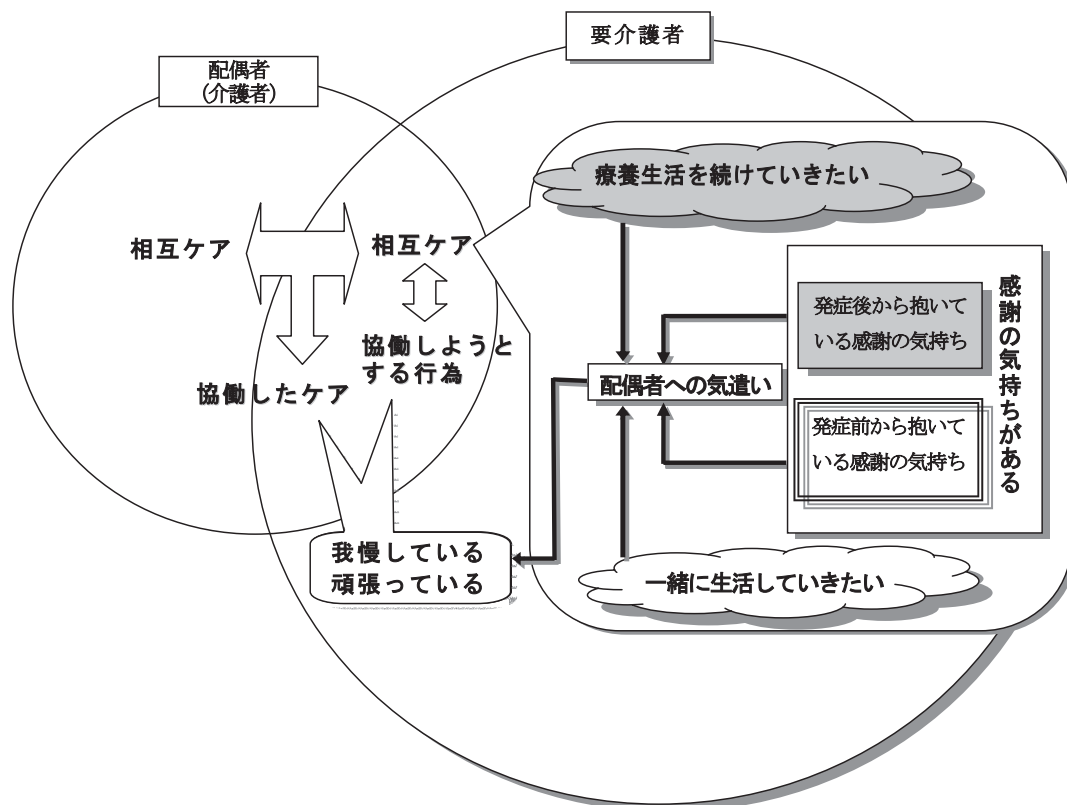
### 4. データ分析方法

面接によって得られた内容から逐語録を作成した後、それぞれの対象者の意図する思いを概念化し、要介護者の介護者への思いに着目しながら図式化し整理した。また、対象者に共通する思いの関連性を分析するために4名の分析結果を統合し、在宅療養の継続に関する要介護者側の思いを統合したものを結果とした。

## IV. 結 果

対象者4名のデータを分析した結果、在宅療養の継続に関する要介護者側の思いが抽出された。要介護者側の思いの因子としては、『感謝の気持ちがある』『一緒に生活していきたい』『配偶者への気遣い』『頑張っている』『我慢している』『療養生活を続けていきたい』の6項目が抽出され、それらの関係性について明らかとなった（図1参照）。

図1 在宅療養を継続できている夫婦のみの高齢者世帯における要介護者の介護者に対する思い



### 1. 『感謝の気持ちがある』

対象者3名にみられた配偶者への思いとして『感謝の気持ちがある』が明らかとなった。その感謝の気持ちには、「発症前から抱いている感謝の気持ち」と、「発症後から抱いている感謝の気持ち」が挙げられた。

まず、「発症前から抱いている感謝の気持ち」は、「若い時は、女房に両親と2人の子どもの世話をしてもろうた。随分苦労させた」との発言より、発症後の生活に対してだけでなく、発症前から、配偶者に対して苦労させたという感謝の気持ちや、配偶者が以前からよく家事を手伝ってくれていたことに対する感謝の気持ちなどであった。つまりこの「発症前から抱いている感謝の気持ち」は、長年の夫婦の関係性から生じている思いであると捉えることが出来、要介護者はその感謝の気持ちを抱きながら現在も療養生活を送っていることが明らかとなった。

次に「発症後から抱いている感謝の気持ち」は、療養生活が開始してから要介護者が介護してくれる配偶者に対して抱く感謝の気持ちであった。「元気な時はそんなこと思わんけど、今こんなになって初めて女房のありがたみが分かる」との発言より、要介護者は配偶者が発症後の生活を支えてくれていることに対して、感謝の気持ちを抱いていることが伺えた。

しかし、このような『感謝の気持ちがある』ことは、要介護者は配偶者に対して伝えていないことも明らかとなった。

### 2. 『一緒に生活していきたい』

研究者の「今後も奥さん（ご主人）と一緒に生活していきたいですか」との質問に対して、4名ともに「一緒に生活していきたい」という発言が聞かれ、要介護者は配偶者と『一緒に生活していきたい』という思いを強く抱いていることが分かった。また4名全員に共通していたのが、唯一この『一緒に生活していきたい』という思いと、次に述べる『配偶者への気遣い』であった。

### 3. 『配偶者への気遣い』

「ショートステイは家内が気を休める時間

やろうし、家内の気を休めるために行くようにしている」との発言より、配偶者も加齢による身体機能の低下がみられるため、要介護者は配偶者の身体面を気遣っていた。そしてこの『配偶者への気遣い』の思いは対象者4名ともに述べていた。内1名は、現在はまだ配偶者の体調が良好であるため、今の状況では身体面に関して心配することは少ないが、配偶者が現在の健康な状態から悪くならないように気遣っていた。

『配偶者への気遣い』は、『一緒に生活していきたい』と同様に4名共通にみられた思いであることから、夫婦のみの高齢者世帯で在宅療養を継続する際に、この二つの思いが何らかの基盤となることが明らかとなった。

一方、全員ではないが要介護者は、自身が療養生活を続けていくためにも配偶者には元気でいてほしいという思いも抱いていることが明らかとなった。この場合、気遣いは配偶者のために行われているというよりは、要介護者自身の思いを遂げるために行われていた。

### 4. 『頑張っている』

対象者4名それぞれから、『頑張っている』ことが語られ、要介護者は介護を受けるだけでなく、自分自身でも現在の療養生活を維持していくために、積極的に出来る範囲のことは自分できょうと努力していることが明らかとなった。また、4名中3名は具体的な目標を持っており、配偶者のことを思いやりながら頑張っていること、あるいは自分自身のしたいことができるようになるためにも現在頑張っていることがあることなどが明らかになった。

### 5. 『我慢している』

対象者2名からは『我慢している』ことがあることが語られた。中でも、「いつも小そうなるとるもん」との発言より、発症後、夫婦の立場が逆転したため、発症前よりは自分の頭を低くして日々過ごし、配偶者の負担軽減のために自ら納得して『我慢している』ことが明らかになった。また、自分の欲求を満たしたいという強い思いを抱きながらも、配偶者の負担に気付き負担軽減のために仕方な



く自分を抑えている場合や、なぜ配偶者が自分に対して否定的な言葉を発するのか理解出来ないまま自身を抑えているケースがあることも明らかとなった。配偶者のためと思える我慢は要介護者にとってもストレスが少ないが、両者の気持ちがすれ違う中での我慢は、結局要介護者の努力は介護者に伝わらず、要介護者はただ戸惑いながら自分を押さえているようであった。

## 6. 『療養生活を続けていきたい』

配偶者と『一緒に生活していきたい』という思いとは別に、対象者3名に自分自身が家で生活したいという『療養生活を続けていきたい』との思いも抱いていることが分かった。これは夫婦で『一緒に生活していきたい』という思いとは少し異なる思いであり、「自由におれるんです」との発言からも分かる通り、家なら自分自身が自由に生活できるという理由からくる思いであった。『配偶者への気遣い』の中で、要介護者自身が療養生活を続けていくためにも配偶者には元気でいてもらいたいという思いがあるのと同様、要介護者自身ができるだけ家で生活したいという強い思いがあること、配偶者にはそのことに協力して欲しいと思っていることが明らかとなった。

## 7. 『協働しようとする行為』

我々は、本研究で抽出された要介護者側の思い6項目のうち、『感謝の気持ちがある』『一緒に生活していきたい』『配偶者への気遣い』『療養生活を続けていきたい』の4項目は、要介護者が介護者である配偶者に対して思いやり、それを介護者に向けている思いであることから『相互ケア』の因子であると考えた。また『頑張っている』『我慢している』の2項目は相手のために行っている具体的な介護に関連した行為であることから、『協働したケア』の因子であると考えた。

対象者の中には「リハビリを一生懸命して、人に迷惑かけないように」と家でもなるべく排泄を一人で行うなど、家でも意欲的に頑張っている姿が見られた。しかし、配偶者は必ずしもこれにより反応を示さないケースもみら

れた。このような、要介護者から発せられる『協働したケア』に対して、時に介護者が反応しない場合や否定的な反応さえ返すケースが今回あった。この場合、要介護者の頑張りは一方的な行為で終わっており、『頑張っている』『我慢している』が、双方の『協働したケア』にまで結びついていなかった。この状態は、例えば発症前の関係性から「この人はこんな人である」という介護者の思い込みがある場合や、要介護者の感謝の気持ちが介護者に伝わっていない場合に起こっていた。要介護者側に『相互ケア』の思いが基盤にあって行われる行為であっても、それが介護者側には自分自身のためと捉えられないため、介護者からの呼応が得られず、『協働したケア』にまでは至らないで終わる。このような行為を我々は『協働しようとする行為』と捉え、その背景には、介護者側が『相互ケア』の気持ちを持てず、要介護者を受けとめられない状態にあることが原因として考えられた。

## V. 考 察

### 1. 要介護者側から抽出された因子の関連性

在宅療養の継続に関する要介護者側の思い6項目は、互いに関連しあっていると考えられた。我々は『感謝の気持ちがある』は要介護者の介護者に対する思いの中心なのではないかと考える。その『感謝の気持ちがある』には「発症前から抱いている感謝の気持ち」と「発症後から抱いている感謝の気持ち」の2つが存在した。我々はこの「発症前から抱く感謝の気持ち」を高齢者夫婦の特徴であると考えた。なぜなら、高齢者夫婦においてこの思いが生じる背景には、長年夫婦として連れ添ってきた時間の長さや培ってきた関係性があるからである。更に、要介護者はこれからも介護者と『一緒に生活していきたい』という思いを抱いているため、今後も夫婦で在宅での療養生活を続けていくことが出来るように、自分で出来ることは積極的に取り組み、介護者の介護負担を減らし、少しでも楽な生活を送れるように『頑張っている』のである。つまり、要介護者は「発症前から抱いている感謝の気持ち」を抱いているから

こそ、日頃から介護者である『配偶者への気遣い』をするという気持ちに繋がるのではないだろうか。

一方、要介護者は介護者の介護負担を軽減するために頑張るだけでなく、我慢している部分も存在した。この我慢は、要介護者が介護者のことを気遣い、介護者に少しでも迷惑をかけないよう介護者の要望を受け入れることで、要介護者自身も納得して『我慢している』のではないだろうか。つまり『我慢している』は必ずしもマイナスではなく、1つの対処方法として要介護者が選択している方法であり、発症後、過去の夫婦関係とはまた異なる新しい関係性を築き、今後の生活の継続を模索している姿であると考えられた。

平川<sup>4)</sup>が「人生を共に生きてきた夫婦であるため、配偶者との一体感が強い。例えば、配偶者が要介護状態になったとしても、二人で長年暮らしてきた、住み慣れた家で共に暮らしていくことを望んでいる」と述べているように、夫婦のみの高齢者世帯はその長年の関係性からお互いを思いやる『相互ケア』が基盤にあると考えることができた。夫婦のみの高齢者世帯においては、長年培ってきた関係性が基盤となり、苦楽をともにしてきた介護者に対して、要介護者は発症後も思いやりを強く抱いている。既存の研究<sup>3)</sup>では『協働したケア』が『相互ケア』をもたらすと述べられていたが、本研究により、夫婦のみの高齢者世帯の【相互作用】においては、『相互ケア』が基盤となって『協働したケア』が生じることが改めて明らかになった。

## 2. 『相互ケア』と『協働したケア』の関連性

研究開始当初、我々は夫婦のみの高齢者世帯における在宅療養の継続には、【相互作用】が不可欠であり、常にそれが成立している状態があると考えていた。しかし【介護者側】にも『相互ケア』の気持ちが失われると要介護者の頑張りが『協働したケア』として活かされなくなる。

【介護者側】の『相互ケア』の気持ちが失われる要因には、要介護者が自宅での『療養生活を続けていきたい』という思いばかり強く抱くようになり、そのために配偶者にも理

解・協力して欲しいと考えるようになると、それが新たな介護負担につながる場合があるのではないかと考える。

大塚<sup>3)</sup>が「長年生活を共にしてきた高齢者夫婦は互いに分かり合ったつもりでいる事も多く」「自分の置かれた状況に苦悩し双方が自己中心的になりやすい」と述べたように、両者の関係が深いだけに、互いへの過剰な期待が、互いの負担を産むことにもつながる。

以上のように、夫婦のみの高齢者世帯においても『相互ケア』がお互いに失われる危機が容易に訪れるのであり、『協働したケア』が成立しないストレスフルな状況に陥りやすいことが明らかとなった。

## 3. 看護の関わり

本研究より、在宅療養を継続していく上では『相互ケア』が重要であることが明らかとなった。その『相互ケア』を促進していく関わりとして、夫婦が発症前どのような生活を送ってきたのか、またどのような思いを基に現在の療養生活を送っているのかを看護者が知ることが重要であると考ええる。以前からの夫婦の関係性を捉えることが出来ると、【相互作用】の中でも今どの部分に関わる必要があるのかを把握することが出来、両者の『相互ケア』を引き出すことが出来ると考えるからである。

また本研究において、要介護者は介護者を思いやる気持ちを持っているが、それを直接介護者に伝えることは難しいことも分かった。林<sup>5)</sup>は、「訪問ケアを行うということは、要介護者と介護者との中に第三者がケアに加わることになる。これによって、関係調整やさらにお互いの信頼関係の構築に寄与できるものとする」と述べている。看護者は要介護者が介護者に対して抱く思いを自分自身で伝えることが出来るように双方に関わっていくことや、両者の『相互ケア』を促進する関わりをすることが重要なのではないかと考える。

## VI. お わ り に

本研究で我々は、夫婦のみの高齢者世帯における在宅療養に対する両者の思いには、発

症後の関係性だけでなく発症前の関係性も強く影響していることが分かった。看護者は介護者、要介護者双方の思いを傾聴し、要介護者と介護者がお互い向き合い、自身の思いを伝えられるように関わっていくことが必要であると考えた。『相互ケア』と『協働したケア』に着目して関わっていくことは、夫婦の【相互作用】を強化し、互いに支えあって療養生活を続けていくことの支援につながると考える。

#### 謝 辞

本研究を行うにあたり、インタビューにご協力いただきました要介護高齢者の皆さま、並びにケースとの出会いを仲介下さった支援事業所の皆さまに心より感謝申し上げます。

※本研究は、2006年度高知女子大学看護学部卒業研究に、一部加筆修正したものである。

#### <引用文献>

- 1) 編集 内閣府：高齢社会白書，株式会社ぎょうせい，2-3，14-15，36-37，2005.
- 2) 財団法人 厚生統計協会：厚生指標，52(9)，46，2005.
- 3) 大塚真理子：高齢夫婦のケアしあう関係を促進する看護援助に関する研究，千葉看護学会会誌，7(1)，20-26，2001.
- 4) 平川香苗子：夫婦世帯の介護者が介護を継続している理由，日本看護学会論文集，第35回老年看護，131-133，2005.
- 5) 林裕栄：長期に在宅介護を継続できている介護者の要因－介護者の介護受容プロセスとの関係から－，埼玉県立短大紀要，4，61-71，2002.